

達させるのかをまず押さえ、そのうえでそのプロセスがうまく進まない諸要因を検討する、ということになる。こうした「適用例」が中心部の理解を助けてくれることもある。私の場合はそうだった。

私たちは、原書が二〇〇五年に発行されてから約一七年の時を経てようやくその訳書の恩恵に浴することできたわけだが、内容の中には、今や日本においてもそれなりに広く浸透しつつある知見もある（たとえば、無秩序・無方向性型のアタッチメントに対する懸念など）。それは、一九七〇年代半ばにこの研究が開始され、徐々に結果が発表されるようになってから今日までの間に、本書の翻訳チームのような、この領

山竹伸二著

『共感の正体』

つなかりを生むのか、苦しみをもたらすのか

精神療法における世界のトレンドが「関係」や「情動」に向けられるようになった（ブックガイド・ショア著『右脳精神療法』、本誌三三

域に精通した研究者や臨床家が少しずつ同種の知見を紹介してきてくれたおかげである。それら個々の成果を発達年齢ごとに、また臨床への示唆をも取り込みながら、一望できる形でまとめられた労作の邦訳出版は、その中核的な発達観が古びないゆえに、一七年を経てもなお意義深い。しかも訳文が読みやすい。ありがたいことである。原書出版後もこの研究は続いていたはずで、今後その成果を理解していくうえで、本書は必須と言える。「その後」は、邦訳ではいつどのような形で読めるのだろうか。楽しみである。

内海新祐

（うつみ・しんすけ／旭児童ホーム）

なった。臨床家にとつても「感じ取る」こと自体がさほど容易なことではないという現実と直面するようになったからである。そんな状況にあつての本書『共感の正体』の出版である。

著者山竹伸二氏は評論家であつて臨床家ではない。しかし、氏は臨床心理学の世界に精通し、一貫してその分野の諸問題について、その本質をめぐって哲学的思索を続けている希有な存在である。これまでも本誌のブックガイド（一七号、二〇一）で取り上げた『認められた「正体」』（講談社現代新書）の他、『心理療法という謎』（河出ブックス）、『こころの病に挑んだ知の巨人』（ちくま新書）など臨床家にとつて参考になる著書は少なくない。世界に数多くの心理療法が存在するため、われわれ臨床家はどれをどのように考え、取捨選択してよいか、路頭に迷うことも少なくない。『心理療法という謎』はこのような複雑な心理療法の世界の本質について鋭く切り込んでいる。そして、本書についてである。

今日巷でも「共感」に注目が集ま

つている。その一つの要因にはHS P (Highly Sensitive Person) と いわれる非常に感受性の強く敏感な人の存在がある。こうして共感に対して否定的な見方も提示されるようになったこともあつて、それまで臨床家にとつて必須な要件とされ、肯定的に語られることがほとんどであつた「共感」に正面から向き合い、その本質を考えてみようというのが本書である。

これまで共感についてどのように考えられてきたのか、その歴史が、動物行動学、発達心理学、脳科学などの視点から整理されている。ついで本書の特徴ともいえる近代哲学の共感論が丁寧に論じられている。そして後半が本書の肝であるフッサールの現象学の本質観取に基盤を置きながら共感の本質に迫っている。そこで強調されているのが、共感の質は発達に伴つて変化してゆくこと、つまり①自他未分化の段階、②自他

共感の正体

河出書房新社 2022年
2100円（税別）

分離の段階、③自己意識の確立へと

進み、われわれの目指す認知的共感へとつながっていくとしている。ここで最も重要なことは、他者の共感によつて自己了解と「存在の承認」を獲得するということ、さらに共感には自己了解と同時に他者了解が生じるということである。

これらの指摘は、臨床家にとつても精神療法を営むうえで忘れてはならない重要な観点である。なぜなら、冒頭で述べたように、精神療法において「関係」と「情動」に焦点が当てられるにつれ、臨床家自身の感じ取る力、つまり「感性」が強く求められるようになったからである。

精神療法でなにより重要なものは「患者―治療者」関係である。そこで治療者はまずは患者の苦悩や思いを感じ取り、受け止め、そして映し返してあげるといふ臨床力が求められる。なぜなら、そのことによつて初めて患者の自己了解が進み、自分の「存在の承認」が得られるからである。この患者―治療者関係における共同作業の繰り返しが最終目標である深い自己了解、つまりは洞察へ

とつながっていく。

評者もこのような治療原理に基づいて、臨床家の感性を磨く「感性教育」を、これまでは学生に、今では臨床家にまで広げて実施しているが、そこで臨床家は感じ取ることの難しさに直面して苦悩することが少なくない。患者の苦悩に共感的に臨むことによつて、臨床家自らの過去の苦悩した情動体験そのものが生々しく想起されるという事態に直面するようになったからである。臨床家は患者の苦悩を共感的に感じ取るこ

とが求められるにもかかわらず、臨床家自身のこれまで抑圧してきた苦悩の情動記憶が賦活化される。彼らの少なからずはそれに圧倒されてしまい、今自分自身が感じていることは、果たして目の前の患者の苦悩そのものに対する共感なのか否か、大きな混乱に直面することになる。共感力を高めるためには、まずは自己了解が求められるということである。「共感には自己了解と同時に他者了解が生じる」の意はここににある。HSPといわれる人たちの少なからずは同じような傾向を有するのではないかと推測されるが、臨床家が

「関係」と「情動」に焦点を当てた精神療法に取り組むうえで、この種の問題は等閑に付すことのできない非常に重要かつ深刻な問題である。

「情動」を扱うことの大切さと難しさを前にしたとき、共感についてそ

◎高橋 脩著

『発達障害児と家族への支援』

の本質を考えさせてくれる本書は、じつにタイムリーな登場だと心から歓迎したい。

小林隆児

（こばやし・りゅうじ／感性教育臨床研究所）

著者は、半世紀にわたり発達障害の臨床と研究の第一線を歩んできた斯界の重鎮である。本書は『発達障害児と家族への支援』と題されている。が、平凡なタイトル名からだけでは、この本の魅力を感じとるのは難しい。本書の構成は少し独特で、「インタビュー」と「論文・エッセー」の二部から成るが、読者に伝えたいことのすべては「インタビュー」の中にぎつしり詰め込まれている。「論文・エッセー」は著作集であり、「インタビュー」での主張を裏づけたり補完したりする位置づけになる。

第一部「インタビュー」を簡単に

紹介しておこう。一〇の章があり、順に「はじめに」「診察の前に」「診察をする」「自閉症の診断と予後」「特異的な行動の意味」「こだわりとその対応」「大人になってからの診断」「子どもとのコミュニケーション」「療育の役割・発達支援と子育て支援」「障害をどう考えるか」となる。章立ての内容はどれも発達障害を語るうえで重要であり、その点は類書と比べて際立った違いはない。しかし本書には他にない特徴がある。ひとつは、著者がインタビューアとの対話・問答で語り進める形式をとっていることである。

一般に、確立されたエビデンスに